

今週のメニュー

■トピックス

◇「安心して使える塩ビ管」の普及・啓発活動、計画最終年の取り組みスタート

■随想

◇小笠原紀行（その4）－のんびり、自然の楽園母島－

上智大学 地球環境学研究科 織 朱實

■編集後記

■トピックス

◇「安心して使える塩ビ管」の普及・啓発活動、計画最終年の取り組みスタート

塩化ビニル管・継手協会では、全国の自治体・事業体を対象に塩ビ管・継手の普及・啓発活動に取り組んでいます。3ヶ年計画で始められた取組の最終年となる平成27年度の活動が7月からスタートしました。この2年間の状況と仕上げの本年の活動について紹介いたします。

「安心して使える塩ビ管」の3ヶ年の普及・啓発活動は、水道・下水道及び農業用水の3分野を重点に、計75の自治体の担当部署・事業体を訪問し、塩ビ管の耐久性、耐震性などに関する最新の研究データの紹介などにより、塩ビ管の有用性をアピールし理解を深めてもらうのが狙いです。2年目となる平成26年度は、25自治体123部署を、更に、水道用途で塩ビ管の使用比率が高い小規模都市（全国簡易水道協議会加盟の市町村14ヶ所）と、上下水道への使用についてコンサルタント業務を行う全国上下水道コンサルタント協会の4支部を訪問しました。1年目の活動（24自治体116部署を訪問）とあわせ、2年間の活動をとおして、塩ビ管に対する自治体の評価や上下水道の関連団体などの認識も変わってきており、既に広く普及している下水道用への期待はもちろん、水道用についても耐震性能とコストパフォーマンスの良さから、従来の鋳鉄管などとすみ分け使うという考え方が広がりつつあるとのこと。

3年目の最終年となる平成27年度は、引き続き約27の自治体、事業体、及び全国簡易水道協議会加盟都市を訪問する予定、さらに下水道コンサルタント協会の地方支部については全6支部のうちの残りの2支部を予定しています。

水道用途については、基幹管路（導・送水管）、配水管路で、塩ビ管・RRロング管（例；写真1）を使用している自治体・事業体をピックアップして訪問し、ヒヤリングなどの現状調査を行うとともに、調査結果の広報などにも取り組む計画です。下水道用途については、



写真1. 塩ビ管・RRロング管

下水道普及率（現在約77%）のため、未普及地域解消のモデル試験地区を訪問するほか、社会資本総合整備計画を立案中の自治体に向けて、下水道用塩ビ管を提案するなどの活動も計画しています。



耐震配管モデル（下水道展から）

- ・硬質塩ビ管用 90 度自在支管（90SVRF）
- ・ゴム輪受口片受け直管（SRA）
- ・塩ビ製可とうマンホール継手（MRKI）

[塩化ビニル管・継手協会のホームページ](#)においても、この活動内容と資料「水道編（改訂版では、RRロング管の耐震性、経済性に関するデータなどがさらに充実）」、「下水道編」農水編」、協会案内がご覧になれますのでご参照ください。

■ 随想

◇小笠原紀行（その4）ーのんびり、自然の楽園母島ー

上智大学 地球環境学研究科 織 朱實

今回は小笠原の食べ物を紹介しようと思ったのですが、写真をあまり撮っていなかったのそれは次回に回し、父島と並び小笠原諸島の有人島である母島についてご紹介します。

母島は、父島から南へ約 50km、「ははしま丸」で父島二見港から 2 時間 10 分で到着する、面積 19.88km、人口 約 450 人の島です。竹芝棧橋から出発して、父島に到着するとその海の青さ、山の

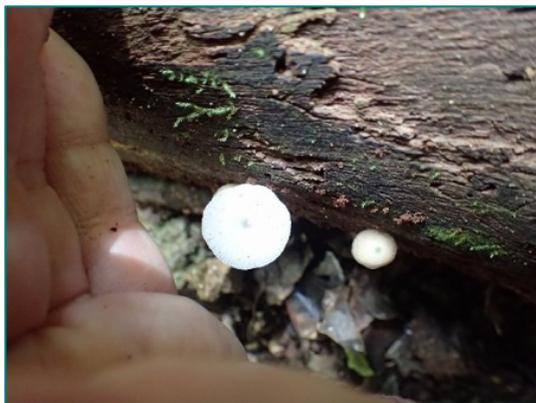


緑の濃さに感動しますが、母島はさらに海が青く、緑が濃く、集落も現在は沖港周辺だけの本当にのんびりとしたまさに『The 島』という感じの『島』です。母島と比較すると、父島はお店もたくさんあり、「都会だな」という感じがします(笑)。たとえば、父島には信号機が 2 か所にあるのですが、母島には 1 か所もなく、母島の子供たちは信号機を見たことがないので、信号機というと工事用の臨時信号機を信号機だと思っているそうです（さらに、母島には高校がないので、母島の中学生は高校生になると父島の『ギンネム荘』という寮にはいります）。

父島まで 25 時間 30 分かけて、さらに 2 時間 10 分かけて母島まで、という観光客はあまりいないようで、なかなか足を延ばしてもらえない母島ですが、小笠原に来たら是非母島まで訪問してもらいたいと思います。いくつも魅力がありますが、最大の魅力は、父島ではすでに絶滅に近い陸生貝類（かたつむり）が、母島にはまだ生息しており、簡単に見ることができること。南崎の周りにはちょっといけば固有種がたくさんいることは前回紹介しましたが、さらに、頑張って境ガ岳、石門へと続く山道を歩くと、ここにしか生息していない「オガサワラオカモノアラガイ」というくずもちのようなかたつむりを見ることができます。



オガサワラオカモノアラガイ



グリーンペペ（夜は緑に光ります）

植生も父島はほとんどがモクマオウにおおわれています（あとは外来種のアカギ）、母島にはシダ林などの原生林で多様な植生を見ることができます（アカギはここでも残念ながら繁殖していますが）。父島では、ナイトツアーでわざわざ出かけても 1 本だけ？ということもある夜光るキノコ（グリーンペペ）も、桑の木山では夜ほんのり緑色に光るほど群生しているそうです（街灯もなく真っ暗なので、夜は怖くて私は行ったことがないのですが）。

近くの鯉島では、カツオドリが営巣しているので「ははじま丸」で母島に向かう途中で、カツオドリの雄大な姿を見ることができます（なぜか、カツオドリは「ははじま丸」で休みながら魚を取っているみたいで、本当に近くに来てくれるのです）。

母島は、かつては水産加工工場もあり、南の農作物も豊かで人口も父島より多い 2000 人近くいたこともあり、集落もいくつもあったそうです。太平洋戦争の際の強制疎開後は、人口は戻ることもなく、かつて集落があった北港付近には、小学校の廃校跡地や加工工場跡地が残されています。廃校探検も楽しいのですが（校門跡があり、給食のプラスチックのお皿などが散らばっています）。この北港、東港付近のサンゴ礁はとても綺麗で、住み着いている亀やたくさんの魚を見ることができます。



貸し切り状態の北港



海の中はサンゴ礁にたくさんの魚

一番凄いのは、星空です。父島でも本当にきれいな星空に感動するのですが、母島はさらに光がないので、手が届きそうな星を見ることができます。父島が、観光の島なのに対して、母島は農業の島で特産品はパッションフルーツ、島トマトです。特に、島トマトは本当に甘くて、大人気でシーズンでもあっという間になくなってしまうのでなかなか島の人でも食べるできないくらいです。

こんな母島ですが、今年は稼ぎ時の8月に2つも台風が直撃し、父島まではきたけれど母島にはいけない、あるいは小笠原行自体をキャンセルする観光客が続出し、民宿のみなさんは大打撃だったそうです。自然が相手とはいえ、やはり島生活は大変だと思わされます。こんな自然豊かな母島にも、人の行き来にともないグリーンアノール、ねずみ、プラナリアが侵入し、希少な固有種が危機に晒されています。島のみなさんと、どうやって外来種を防ぐか、ねずみ対策などいろいろなワークショップ、野外勉強会など実施しているので、まだまだ母島訪問は続きそうです。

⇒ [メルマガ・バックナンバー](#)

■ 編集後記

先日テレビで、ノグチゲラという沖縄固有のキツツキ（特別天然記念物）の子育ての様子が紹介されていました。親鳥は木の幹をくちばしでつついて巣穴を作り、協力して子育てをします。

川ベリでは、巣がカラスに見つかってしまったため親鳥が早めに巣立ちを促したのですが、ヒナが巣穴から飛び立った瞬間にカラスに襲われてしまいました。“自然の出来事”と言ってしまえばそれまでですが、本来はカラスなどの大型の鳥が来ない森の奥に巣作りをするのですが、ダムなどの開発で安全な巣作りの場所が少なくなっているとのことで、複雑な気持ちになりました。（漠）

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 高橋 満

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp